あ と が き

本集には、松蔭女子学院草創期の 2 人の宣教師校長が遺した文献を収めた。いずれも日本についての研究をテーマとする英語で書かれた文書である。

開国後、外交・宣教を目的として来日する外国人にとっては、日本についてよく知ることがその第一歩であり、日本の風土、歴史、社会制度、生活習慣について観察・研究したレポートや書物が外交官や各教派宣教師によって著述されている。

維新から間もない1872年には、日本在住の英米の外交官、実業家、宣教師らのグループによって「日本についての知見を深めるための定期的会合を持つ」ことを目的として「日本アジア協会」が創設されている。そこでの講演や会誌に英語で掲載された日本研究文書は、メンバーにとって「新鮮かつ驚きの連続」であり日本研究誕生の足がかりとなったと言われる。本集の「SUMA MURA FIFTY YEARS AGO」はそこでの発表である。

『JAPAN AND HER PEOPLE』の方は、第十集に収めた『WINDOW ON JAPAN』と同じく海外で出版された日本研究書である。

本集の 2 文献を読むと、明治～大正期に松蔭の先生であった宣教師の方々が教育と宣教の一方でこのような日本研究に取り組まれていたことが知られ、深い敬意を覚える。松蔭に遺されたこのような宣教師による研究文献は今のところ、上記の 3 点である。

「SUMA MURA FIFTY YEARS AGO」の筆者、初代校長 Hannah Maria Birkenhead（在任1892.1～1892.7）は、1856年10月 3 日にイングランド北西部チェシャー州のストックポートに生まれた（出生証明書）。ロンドンの高等師範学校を卒業（松蔭女学校生徒募集広告）し、1888年10月、英国の女性宣教団体レイディーズ・アソシエーションから神戸に派遣される最初の宣教師として故国をあとにし、1888

年12月15日に横浜に着いた。

> MISS BIRKENHEAD, the first Missionary worker of the ladies' Association at Kobe, left England with Bishop Bickersteth's party last October, and reached her destination on December 15th.

これが、今のところ、英文資料に Miss Birkenhead の名が出る最初である。この時こそが松蔭誕生へのはじまりである。ロンドン SPG 事務所保管の Birkenhead 履歴書にも「Apptd 1888」（任命1888年）とある。

この記事は、レイディーズ・アソシエーションの機関誌『The Grain of Mustard Seed』（『一粒のからし種』）の1889年 3 月号に掲載されている。Miss Birkenhead は Bishop Bickersteth（ビカステス主教）の一行と共にイングランドを発ったとある。これはどういうことか。そこに松蔭誕生の契機がある。

ビカステス主教とは、英国教会の第 2 代日本主教として1886年 4 月に派遣された Missionary Bishop（宣教主教）である（『松蔭女子学院史料』第一集・第二集「ヒュー・ジェイムズ・フォス回想録」）。

時は鹿鳴館で象徴される欧化時代、不平等条約改正を悲願として近代化を急ぐ時代であった。そんな中、遅れている日本の女子教育振興の対策として「女子教育奨励会」なるものが、伊藤博文首相を評議員長として1887年 1 月に発足した（東京日日新聞）。目的は、「日本の貴婦人に欧米諸国の貴婦人と同等なる佳良の教育」を受けさせることにあり、教育担当者には「外国女教師を聘して」当らせることとした。外国女教師の人選は英国教会系 SPG 宣教師ショーを通してすでに SPG に対して、1886年から始まっており、ビカステス主教着任後は、ビカステス主教がそれに深くかかわることになった（『東京女学館百年史』）。女性教師を日本へという主教の要請は英国に向けておこなわれ、その強いアピールはレイディーズ・アソシエーションに対して行われた（『一粒のからし種』）。

英国人女性教師の第一陣 7 人（いずれも英国教会（聖公会）に属する人々）は1888年

1月に英国を発ち、3月に女子教育奨励会の経営する学校、東京女学館の教師となった。7人の中のミス・パーカーは後年、松蔭女学校の第5代校長(在任1904.4-1904.12)となった人である。

この一連の動きに応じて9か月遅れでレイディーズ・アソシエーションから派遣され、帰英中のビカステス主教とともに来日したのがMiss Birkenheadであった。横浜到着後、東京から神戸へ派遣されることになった彼女が、3年余をかけて奔走し、生徒7名で松蔭女学校開校(『全国学校沿革史』)を果たすまでの経過は、『松蔭女子学院史料』第三集に詳しい。開校後、校長としての在任期間は7か月に満たないが、日本の学校で教えることをこころざして英国を出発し、1万マイルを旅して日本に到着し、小さな塾を作りながら学校開設の希望に向かった初代校長Miss Birkenheadの足跡は重要な松蔭前史である。そのMiss Birkenheadが、松蔭女学校開校の3か月後、1892年4月に横浜(と思われる)で講演した論文が「SUMA MURA FIFTY YEARS AGO」である。

『JAPAN AND HER PEOPLE』の筆者、第8代校長Ethel. M. Hughes(在任1911.4〜1921.6)は、1875年11月10日にロンドンで生まれ、ケンブリッジ大学を卒業(SPG事務所保管履歴書)、高等学校で教鞭を執っていたが、1906年にSPG宣教師として日本に派遣された。

Miss Hughesの日本派遣の背景には何があるか。1902年に締結された日英同盟が契機となっている。

「the friendliness established by the treaty gave peculiar opportunity to the English Church」とSPGの歴史書『INTO ALL LANDS』(1951年発行)に記されている。日英友好関係確立の好機に英国教会は知的階層への伝道強化のために男女9人の宣教師を派遣、その1人としてMiss Hughesは東京に着任したのである。

> Three recruits were also added to the S.P.G. women workers in Tokyo, Miss Tanner, Miss Forbes and Miss Hughes.

『INTO ALL LANDS』に記された文言である。1906年に英国を発っている。

東京着任後、東京女学館の教師を務めていたMiss Hughesであったが、1911年4月、松蔭女学校の第8代校長を命じられ、神戸に着任することとなった。

以来10年の長きにわたって松蔭の学校経営と教育に尽力、その間、学校は高等女学校の認可を得、私立学校として確立した。さらに、Miss Hughesの功績は財団法人設立の決断と準備にかかわったことである。財団法人設立は学校の安定経営のためには必要だが、経営を日本人の手にゆだねれば、愛する松蔭を宣教団があきらめなければならない時が来るのではないか、との苦悩が彼女にはあった。しかし、日本の学校として松蔭が永続する道を決断する。財団法人認可の前年、彼女は病気のため校長を辞任して帰国、財団化に向かう学校とSPGの架け橋となった(『松蔭女子学院史料』第六集・第七集)。1968年1月18日、英国にて93歳で永眠。1928年に出版した著書が『JAPAN AND HER PEOPLE』である。

以上、本集には、私塾松蔭女学校誕生をもたらした初代校長と、外国宣教団経営のミッション・スクール松蔭を「日本の学校」として永続させる上で尽力した第8代校長の研究文献を収載した。

＊　＊　＊

1994年の第一集以来、宣教師文書を主軸に、松蔭の歴史的文献を『松蔭女子学院史料』として公刊してまいりました。歴史的文献はまだまだあり、散逸したり判読不能になったりする前に保存されることが望まれますが、私ども編集者による作業としては本集第十一集をもって区切りとすることになりました。

これまでお世話になりました関係方面の多くのみなさまに厚く御礼を申し上げます。

2019年5月1日　　吉村厚子